アジア的生産様式は、マルクス主義における社会の発展段階の 1 つで、原始共同体と奴隷制の間に存在しうる、古代アジアに見られた史上最初の階級社会および生産形態を指します [1][2][3]。

カール・マルクスは 1859 年に著した『経済学批判』の序文で、資本主義に先行する階級社会として、奴隷制や封建制に並べて「アジア的生産様式」を挙げました。しかしながら、この概念については序文にも論文本文にも詳細な説明がありませんでした。そのため、「アジア的生産様式」については歴史学会や経済学会で様々な論争が行われました。

後にソ連で発表されたマルクスの遺稿『資本制生産に先行する諸形態』により、アジア的生産様式の内容が具体的に明らかになりました。この概念は、古代中国やインドだけでなく、エジプト、メソポタミアなどの各古代専制国家、そして律令体制以前の日本にも存在したとされています [3]。

アジア的生産様式は、共同体の所有があっても個人の所有はなく、個人が土地（耕地）を分配されるのみの存在である点で、古代的・封建的生産様式とは異なります。また、このような機能を国家的規模で独占管理し、共同体の生産と労働を貢納制度によって収奪しているのが専制君主であるとされています [3]。

アジア的生産様式は、歴史的に興味深いものであり、日本でも「大東亜共栄圏」の理論に援用されたことがあります。ただし、この説は現在でも議論の的となっており、異なる解釈が存在しています [3][4]。

[1]: Wikipedia [2]: Weblio 辞書 [3]: Wikiwand

詳細情報

1 ja.wikipedia.org2 bing.com3 wikiwand.com4 weblio.jp5 dictionary.goo.ne.jp+1 その他